

動物考古学の現状と課題

西 本 豊 弘

-
- | | |
|------------------|-----------------|
| はじめに | (2) 第2次世界大戦後の研究 |
| 1. 研究略史 | 2. 現状と課題 |
| (1) 第2次世界大戦以前の研究 | |
-

はじめに

動物考古学とは、動物遺体を通して過去の人間生活を考える考古学の一分野である。動物の骨格や生態に関する知識が必要であるが、動物学や解剖学の一分野ではない。あくまでも人間が対象であり、人間の生活を考える手段・方法として動物遺体の分類を行うのである。

さて、共同研究の序文にも述べたように、「動物考古学」という名称は新しいが、動物遺体の分類とそれに基づく研究は、近代における考古学の始まりとともに行われていた。そこで、現在における動物考古学の状況を考えるために、まず研究史をふり返ってみたいと思う。なお、日本における動物遺体の研究史については、金子浩昌氏がいずれ当館の報告書で、詳細に事例を挙げて解説される予定である。そのため研究史については、筆者が以前に簡単にまとめたもの⁽¹⁾に加筆する程度にとどめたい。むしろ、これまでの研究の歴史をふり返り、現在どのような問題点があるかということを中心に考えてみたいと思う。

1. 研究略史

日本の考古学の中で、動物考古学の研究をふり返って考える場合、貝塚の研究と切り離して考えることはできない。そのため必要な限り貝塚の研究についても触れざるを得ないが、動物遺体の研究を中心にして、その流れを見てみたいと思う。なお、研究史を考える際の便宜的区分として、第2次世界大戦の前後で区切って考えることとしたい。そして、主要な研究者の業績を中心にその時代の研究動向をみてみようと思う。なお、研究論文や報告書については、ここで引用・参考文献としたものは極くわずかである。特に、戦後の研究例については大部分を省略させていただいた。1991年度刊行予定の金子浩昌氏の研究史および西本・松井編の文献目

録で補っていただきたい。

(1) 第2次世界大戦以前の研究

1 研究のはじまり

1877年、モースによって大森貝塚が調査されたことは、近代における日本の考古学の始まりと言われているが、モースが貝類学者であったことから、動物遺体研究の始まりでもあった。⁽²⁾モースは進化論的視点から大森貝塚出土の貝類に興味を持ち、それらを現生種と比較して個体の大きさの変化や絶滅種の存在等を指摘した。しかし、貝類以外の動物遺体にはほとんど触れていない。このように明治初期の考古学研究の始まりの段階では、動物遺体もある程度役割を持っていた。しかし、その後の日本の考古学の関心は日本人種論となり、アイヌ説やコロボックル説などが展開されるようになった。その論争の一方の代表であった坪井正五郎は、1886年に遺物を人工遺物と天然遺物の二系統に区分した。⁽³⁾彼も以前に生物学を専攻していたために、生物学の系統樹的発想で遺物を分類したと思われる。これ以降、人工遺物に対して天然(自然)遺物の区分が広く行われるようになった。自然遺物には貝殻や動物骨の他に石ころまで含まれるとされた。なお、モースによって行われた貝類を中心とした動物遺体の研究法は坪井正五郎に受け継がれていない。たとえば、坪井が1892年に発掘した西ヶ原貝塚の報告においても、天然遺物は貝殻・魚骨・鳥骨・獣骨・歯牙・角と記しただけで、これ以上の説明はされていない。⁽⁴⁾その当時の考古学の研究は、遺跡・遺物の年代とその系統が大きなテーマであり、自然遺物も年代を決定する材料のひとつと考えられるようになっていたのである。

2 貝塚の年代決定のための貝類研究

貝塚を構成する貝類の違いによって、貝塚の新旧を決定しようという試みを最初に行ったのは八木装三郎と下村三四吉である。両氏は1894年阿玉台貝塚の報告書を刊行し、その中で貝類の内容から当時の海岸線を推定して、それに基づいて貝塚の新旧を決めようと試みた。⁽⁵⁾このように、貝類の内容と貝塚の地理的位置をもとに、遺跡・遺物の新旧を決めようとする試みは、第二次大戦まで貝類研究の主要な目的のひとつであった。それは、1926年の東木竜七・1935年の甲野勇・1942年の酒詰仲男などの論文となって現れた。⁽⁶⁾特に酒詰仲男によって、それまでの一方的な海退論ではなく、縄文時代前期にピークをもつ「縄文海進」が明らかにされた意義は大きい。このような貝類研究の成果は、貝類のみの研究から導きだされたのではなく、貝層の層位的発掘によるところが大きいと思われる。

3 新種の認定の問題

この時期の貝類以外の動物遺体の同定が、主に古生物学者や人類学者に依頼されていたことから、動物の個別の種の形質について論じられることも多かった。たとえば、長谷部言人や松本彦七郎・直良信夫らによる一連の研究である。動物の種ごとに研究することは、研究方法と⁽⁹⁾

しては、当然のことであるが、直良信夫を除いては、人間との関係をほとんど考慮にいれない、専ら動物学上の興味によるものであった。また、当時の知識からみれば仕方のない面もあるが、現在からみれば分類の内容にも問題が多いことは残念である。

4 経済活動の復元を目的とした研究

考古学の研究の中で最も重要なことのひとつは、遺跡や遺物の時期を決めることである。縄文時代の遺跡からは土器が多く出土することから、これまでの縄文時代の研究の中心は各地の土器を編年することであり、土器の前後関係を把握するために貝塚の発掘が行われた。このような土器の編年を目的とした貝塚の発掘では、貝層は単に土器の新旧を決めるための目安にすぎず、貝層のもつ情報性を十分に意識した発掘は行われなかった。たとえば、縄文人の狩猟活動については、発掘途中に目につく大きな骨のみを極く少量採集して、動物骨の専門家に分類を依頼して、シカ・イノシシが多かったという記載を報告する程度であった。縄文人は、シカ・イノシシ・タヌキ・キツネなどを狩り、マダイやクロダイ・スズキなどを捕り食料としていたという程度で十分であるというのが一般の考古学者の考え方であった。このような傾向は戦後まで続き、現在でも多くの研究者の考え方であるように思う。

さて、戦前の動物遺体の研究の中で、生業活動に関する議論が行われた例をいくつか取り上げてみると、まず、椎塚貝塚出土のマダイの頭骨をめぐるとある⁽¹²⁾。これは、マダイの前頭骨に骨製の刺突具が刺さったまま出土したもので、骨器の使用法と魚類の捕獲法を示す資料としてよく知られている。また、動物遺体と骨角器・石器等の利器をまとめて論じたのは岸上鎌吉⁽¹³⁾である。岸上鎌吉は専門である水産学を生かして、先史時代の漁労活動に視点がおかれた動物遺体の解釈が行われている。骨角器・石器等の遺物について記載と解釈には問題があるが、動物遺体から生業の実態に迫ろうとする試みとして重要である。岸上の著作以降、その伝統を受け継ぐものは現われず、土器形式の編年に貝塚を利用しようとする甲野・酒詰の論文にみられるような研究が主体となっていたのである。

ところで、先史時代の生業研究に対する関心は、1920年代後半から1930年代にかけて、かなり高まったようである。それは、大山柏を中心とする史前学研究所の活動によるところが大きい。大給尹⁽¹⁴⁾、大山柏⁽¹⁵⁾の論文が相次いで史前学雑誌に発表された。しかし、大山柏の生業研究はヨーロッパの考古学の成果を紹介したり、それらの知識と民族例を用いて、先史時代の生業について一般的な説明を試みただけである。大山は貝類研究を重視したが、層位学の軽視と貝類の量的比較を十分に行わなかったことは残念である。ヨーロッパ考古学の知識があったためか、従来の環境決定論の立場をとったことも影響しているかもしれない。大山にとっては、遺跡から出土する動物遺体の分析を基礎とした実証的研究は、主要なテーマとなっていなかったと思われる。もっとも、史前学研究所の研究員である大給尹と酒詰仲男は、動物遺体の分析によって、それぞれエイに関する論文⁽¹⁶⁾やハイガイの肋数についての論文⁽¹⁷⁾を発表している。

また、人間との関係を強く意識した研究としては、鈴木尚の1935年の論文がある。⁽¹⁸⁾これは、遺跡出土の獣骨の割れ方に注目し、現代の骨折状況との比較から、人為的に割られたことを証明して、骨髓食について述べた興味深い論文である。また、古生物学の立場で分類しながらも、古代の人間に常に暖かい目をもって研究を続けていた直良信夫にも、注目すべき論文が多い。⁽¹⁹⁾その中で、1930年の論文は、遺跡の利用時期の季節性について初めて述べたものである。

5 第2次世界大戦前の動物遺体の取り扱い方の特徴

戦前の動物遺体の研究を戦後と比較すると、まず気が付くことは戦前では動物遺体の種名のみ記載しか見られないことである。出土量については、その多少を述べている程度であり、定量的な分析と記載は行われていない。たとえば、貝類研究を重視した史前学研究所で実施した貝塚調査のひとつである「小仙塚貝塚」の報告では、種名と「ハマグリが多い……」という程度の記載しか行われていない。⁽²⁰⁾種だけ分かればよいと考えられていたのであろう。

次に、戦前の場合、動物遺体の研究といっても、その主要なものは貝類に関するものであった。魚類・鳥類・哺乳類の同定は、一般の考古学者の理解では頭蓋骨や上・下顎骨を除いては困難であると考えられていたようである。そのため、シカ・イノシシなどのように、よく知られた動物のみがどこの貝塚でも出土していると記載され、その他の動物については内容がよく分からない。戦前に、貝類から哺乳類までの動物骨を分類できたのは、直良信夫だけであったと思われるので、研究者の不足と言わざるを得ない。

このような状況は、考古学者の中に動物遺体は専門家に任せればよいという姿勢があったことに起因しているのかもしれない。それと同時に、自分で確実に同定できないのに、適当に類推して、種を決めたりすることもあったらしい。このことは、直良信夫が、「貝塚を発掘される人々に一言お願いして置きたい事がある。それは、貝塚を発掘されて、獣骨（主に四肢骨）が出て来たならば、自分勝手に鹿だとか猪だと直ちに発表しないようにしていただきたい事である。甚だしいのになると、麗々しく学名まで書き立てる人もある。」と述べていることから⁽²¹⁾うかがえる。

以上に述べた三つの取り扱い上の問題点は、考古学者の側に、動物遺体の研究は考古学ではないという意識があったためであると思われる。動物遺体は種名さえ分かればよく、動物学者に同定だけしてもらえばよいと考える考古学者が多かったためであろう。

(2) 第2次世界大戦後の研究

1 戦前の研究の継続

第2次大戦後の日本考古学は、岩宿遺跡の発見と旧石器時代の確認など新たな研究分野が登場した。縄文時代の研究では、最古の土器の追及が主要な目的のひとつであった。酒詰仲男によれば貝塚や洞窟の調査も最古の土器を求めて各地で行われた。⁽²²⁾また、実年代の推定のために

姥山貝塚の木炭がシカゴ大学に送られたのも、編年研究の一端を示すものである。このように、縄文時代の研究には新しい視点と方法が現れたが、動物遺体の研究はしばらくの間は戦前と同様の種名のみの記載とそれに基づく研究が発表された。たとえば、酒詰仲男の著作などが挙げられる⁽²³⁾。その中でも、『日本貝塚地名表』と『日本縄文石器時代食料総説』は、酒詰仲男の動物遺体研究の集大成というべき労作であり、現代でも重要な文献のひとつである。しかし、文字どおりの地名表と種名表であり、ほとんど考察が加えられていないのが残念である。

2 量的記載の始まり

戦後の動物遺体の新しい展開は、考古学者である金子浩昌による大倉南貝塚の報告で動物遺体の出土量が記載されたことによって始まったと言える⁽²⁴⁾。金子浩昌は、それ以降多くの遺跡の発掘報告の中で動物遺体の種名と部位と出土量を記載し、各地域・各遺跡ごとの動物利用の地域性を明らかにしようと研究を進めてきた⁽²⁵⁾。しかしながら現在においても、動物遺体は発掘時点で目についたものを少量採取するだけでよいし、種名だけの報告でよいとする考古学者も多い。それにもかかわらず、現在では動物遺体の出土量が多くなり、動物遺体を扱う考古学者も増加して報告書が各地で刊行されるとともに、多くの研究が行われるようになってきた。それらの研究をすべて紹介する余裕はないので、主なものを以下に取り上げることとする。

3 動物遺体の持つ情報性の認識

動物遺体に関連する戦後の研究の主なものを羅列的に取り上げてみると、まず赤沢威はマダイ・クロダイなどの顎骨の大きさを計測し、それをもとに個体の大きさを復元し、マダイなどの生態を考慮しつつ縄文時代の漁撈法を復元しようとした⁽²⁶⁾。林謙作は、浅部貝塚の動物遺体の定量的取り扱いによって考察を深めて、遺跡利用のあり方を考えた⁽²⁷⁾。さらに遺跡の中での動物遺体の出土状況に注目し、獲物の分配の可能性を考え、遺跡と遺跡の関係まで考察を進めた⁽²⁸⁾。筆者は、イノシシの自然分布しない北海道にイノシシが出土することから、縄文時代後期の動物儀礼の存在とその意義を論じた⁽²⁹⁾。これらは、動物遺体を通して考古学的解釈を導き出そうとしたものである。さらに、「サケ・マス論」について発掘成果を基に様々な議論が行われ、縄文時代の食料について理解が深まったといえる⁽³⁰⁾。

一方、動物学の知見や自然科学的手法を用いた研究として、小池裕子の貝殻の成長線による死亡時期査定法の考古学への応用や筆者等の動物の歯牙にみられる年輪による狩猟時期の推定などの研究がある⁽³¹⁾。動物遺体の年齢構成についての所見は、歯牙の萌出と摩耗の程度の詳しい観察と記録によって得られるようになり⁽³²⁾、すでに述べた動物の歯牙の年輪法も一部には応用されるようになっている。また、最近では古い骨にも脂肪酸が残っていることが明らかとなり、考古学への応用もかなり行われている⁽³⁴⁾。この他に骨による年代測定も積極的に行われて、新しい知見が得られるようになっている⁽³⁵⁾。

さて、従来の遺物の採集法に疑問を持ち、これまでの発掘で見落とされていた小さな魚類の

骨が貝塚に多く含まれていることを証明したのは小宮孟⁽³⁶⁾である。そして発掘区全体や貝塚全体に貝殻や魚骨・獣骨等がどのくらい含まれているかを考えるために、発掘時点での遺物採集の際に柱状ブロックサンプル法が行われるようになり、貝塚全体に含まれるカロリーを計算して、動物質食料の内容を検討する試みも筆者によって行われている⁽³⁷⁾。また鈴木公雄は、伊皿子貝塚で貝層の全体積を計算するために計画的に発掘を行っている⁽³⁸⁾。

貝塚の発掘方法については、貝層を形成する最小の単位を捕えようと試みた調査が東北歴史資料館によって行われた⁽³⁹⁾。また、東北大学考古学研究室による中沢目貝塚の調査では、一回の廃棄単位を捕えようとする試みも行われている⁽⁴⁰⁾。このような目的意識は以前の調査では考えられなかったことである。そして、調査の目的の変化とともに遺物の採集量が増加し、遺物の整理に多くの時間と人手と費用がかかるようになってきている。

さて、これまで見てきた戦後から現在までの研究状況の特徴を考えると、それは貝塚や動物遺体の持つ情報の豊かさに気が付いたことではないかと思われる⁽⁴¹⁾。これまでは、貝殻や動物の骨は何を食べていたかを知る手掛かりとしてのみ利用されてきた。つまり、動物遺体は過去の経済活動を示すもののみ考えられていたのである。しかも、その経済活動の内容も何を食べていたかだけが問題であり、食料の季節性や地域差・時代差などはほとんど考慮に入れられていなかった。ところが、何をどのくらい食べていたかという定量的視点が加わることによって、経済活動の地域間の比較や時期的変化を捕えることができるようになり、人間の移動などその社会全体の動きをもテーマとした議論が可能になるのである。

また、貝殻や動物の歯による季節性の検討も、単なる経済活動の季節性だけではなく、当時の人間の行動の季節性を捕えることになる。たとえば、動物は捕獲しやすい季節に捕られているといわれてきたが、実際に狩猟・漁撈活動の季節性を検討してみると、すべてそうであるとは言えなくなってきている。さらに、動物遺体を通して労働や分配の問題、人間の精神的活動についても情報が得られるとすれば、動物遺体は当時の人間生活の復元について重要な情報源となるのである。

2. 現状と課題

前節では、動物遺体に対する扱い方について簡単に述べてきた。その中で第2次世界大戦後の研究者の仕事については、すべての研究者を取り上げてはいないし、またそれぞれの研究者のすべての業績を取り上げてはいないことを改めてお断りしておきたい。現在活躍中の方々の仕事の内容について、研究史で扱うことは研究の評価をすることになり失礼にあたるのではと思うからである。その失礼を顧みずに業績を紹介させていただいたのは、動物考古学の現状を考える場合にどうしても必要であったからであり、お許しいただきたいと願う次第である。

さて、この節では現在の時点で、動物考古学を取り巻く状況でどのような問題があるかについて私見を述べてみたいと思う。もちろん、ここでは、研究者独自のテーマについて議論するのではなく、また研究全体の方向について私の考えを述べるつもりはない。動物考古学全体の問題として共通のテーマに限って、お互いにどのような協力ができるのかについて考えを述べてみたいと思う。

まず最初に研究史をふり返って気がつくことは、現代では動物遺体の出土量が非常に多くなり、また研究者の数も増えたこと、それにもかかわらず動物考古学にかかわる研究者の数が少なく、それらの研究者が動物遺体の同定に追われて、様々な研究テーマに十分に時間を割けないことである。これは、動物考古学だけではなく考古学のどの分野にも当てはまる問題かもしれない。前節で述べたように、動物遺体や貝塚そのものの持つ情報性は、まだまだ開拓の余地があり、将来発掘される資料はさらに多くなるであろうし、その資料の情報性に関する精度も高いものになるであろう。戦前および戦後しばらくは、ごく少数の研究者で動物遺体の同定と研究を担ってきたが、現在ではとても少数の人間で対応できる状況ではない。動物遺体を扱う研究者がこれまで以上に協力する必要がある。

それでは、どのような分野で協力が可能かといえば、文献情報や遺物の同定の際の協力である。特に、資料の同定は現生標本が不可欠であり、現生標本の所在情報の交換と現生標本の貸し借りが必要である。勿論、出土資料そのものについて、他の研究者の所見を得やすい状況を作ることも重要である。我々が扱う資料は無限ともいってよく、自分ひとりの知識ではわからないものがあって当然である。同定ミスは仕方のない場合があるが、同定は研究の基礎であり出来る限り同定ミスをなくすように努力することは研究者として当然の責務であろう。そのため、現生標本の所在情報を公表して、自由に資料が見られるように協力体制を作っていきたいと思っている。

次に、研究の面で言えば、これまでに公表されたデータの流布の問題である。現代のように発掘調査が多くなると、個人で集められる情報には限界がある。文献情報を出来る限り流布するように努力しなければならない。それと同時に、従来と同様に発掘情報を交換することも当然である。また、動物遺体や貝塚の持つ情報性は個人の研究では十分に引き出せない場合が多いことから、研究全体においても意見の交換をこれまで以上に進めたいと思っている。さらに、動物考古学の研究者を増やすことも重要であろう。そして、なによりも考古学の研究者の中で、動物遺体の重要性を認識していただくことが大切であろう。発掘の際に動物遺体がどの程度の精度で採集されるかは、資料の有効性に大きくかわる問題であり、発掘担当者の認識に大きく左右されるからである。その点で言えば、金子浩昌⁽⁴²⁾や鈴木公雄⁽⁴³⁾による著作のように、動物遺体の意味や貝塚の持つ情報性を流布する努力も大切である。動物遺体の重要性をこれまで以上に認識していただきたいと願っている次第である。

<引用・参考文献>

- (1) 西本豊弘 1988年 「動物考古学の現状」 列島の文化史 第5巻
- (2) E. S. Morse 1979年 “Shell Mound of Omori” Memoires of the Science Department University of Tokyo
- (3) 坪井正五郎 1886年 「東京近傍貝塚総論」 東京地学協会報告 第八年第四号
- (4) 坪井正五郎 1893年 「西ヶ原貝塚探究報告其一」 東京人類学会雑誌 第8巻第85号
- (5) 八木装三郎・下村三四吉 1894年 「下総国香取郡阿玉台貝塚探究報告」 東京人類学会雑誌 第9巻第97号
- (6) 東木竜七 1926年 「地形と貝塚分布より見たる関東低地の旧海岸線」 地理学評論 第2巻第7・8・9号
- (7) 甲野 勇 1935年 「関東地方に於ける縄文式石器時代文化の変遷」 史前学雑誌 第7巻第3号
- (8) 酒詰仲男 1942年 「南関東石器時代貝塚の貝類相と土器形式との関係について」 人類学雑誌 第57巻第6号
- (9) 長谷部言人 1924年 「日本石器時代の猿に就て」 人類学雑誌 第39巻
——— 1925・1929年 「日本石器時代家犬に就て・追加1～3」 人類学雑誌 第40・44巻
——— 1925年 「石器時代の野猪に就て」 人類学雑誌 第40巻
- (10) Hikohitirou Matumoto 1930年 “On a New Race of Sus from the Type Site of Atsuten” Science Report Vol. 13 Tohoku Imperial University
- (11) 直良信夫 1937年 「日本史前時代に於ける豚の問題」 人類学雑誌 第52巻第8号
- (12) 坪井正五郎 1895年 「骨器の用を明示する貴重な遺物の発見」 東洋学芸雑誌 第168号
- (13) Kamakichi Kishinoue 1909年 “Prehistoric Fishing in Japan” Journal of College of Agriculture Vol. 2
魚骨の出土内容に部位によって不均衡があること、従って種類によって保存されやすいものとそうでないものがある可能性を初めて指摘している。
- (14) 大給 尹 1934年 「日本石器時代陸産動物質食料一特に狩猟による食料一」 史前学雑誌 第6巻第1号
- (15) 大山 柏 1934年 「史前生業研究序説」 史前学雑誌 第6巻第2号
——— 1934・1935年 「史前食料概説 其一・二・三」 史前学雑誌 第6巻第5号, 第7巻第1・5号
- (16) 大給 尹 1935年 「史前漁撈関係資料としてのエヒ類(Batoidei)に就いて」 史前学雑誌 第7巻第6号
- (17) 酒詰仲男 1934年 「関東地方に於けるハヒガヒ放射肋数と貝塚貝層新旧の関係に就いて」 史前学雑誌 第6巻第6号
- (18) 鈴木 尚 1935年 「石器時代貝塚出土の獣骨片について」 人類学雑誌 第50巻第3号
- (19) 直良信夫 1930年 「西日本石器時代の陸産貝類」 史前学雑誌 第2巻第1号
- (20) 池上啓介・大給 尹・土岐仲男 1935年 「横浜市鶴見区下末吉小仙塚貝塚」 史前学雑誌 第7巻第4号
- (21) 直良信夫 1935年 「貝塚から発見せらるる哺乳動物について—日本新石器時代民衆の生活と獣類との関係」 ドルメン 第4巻第7号
- (22) 酒詰仲男 1956年 「問題の回顧と展望③ 貝塚—戦後日本における貝塚研究の動向について—」 古代学研究 第14号
- (23) 酒詰仲男 1951年 「地形上より見たる貝塚」 考古学雑誌 第37巻第1号
——— 1951年 「石器時代のアワビ類(Haliotidae)について」 人類学雑誌 第62巻第1号
——— 1953年 「編年上より見たる貝塚」 『日本民族』 岩波書店
——— 1959年 『日本貝塚地名表』 土曜会
——— 1961年 『日本縄文石器時代食料総説』 土曜会
- (24) 西村正衛・金子浩昌 1956年 「千葉県香取郡大倉南貝塚」 古代 第21・22合併号
- (25) 金子浩昌 1965年 「貝塚と食料資源」 『日本の考古学』 河出書房
- (26) 赤沢 威 1956年 「縄文貝塚産魚類の体長組成並びにその先史漁撈学的意味」 人類学雑誌 第77

巻第4号

- (27) 林 謙作 1970年 「宮城県浅部貝塚出土のシカ・イノシシ遺体」 物質文化 第15号
 ——— 1971年 「宮城県浅部貝塚出土の動物遺体」 物質文化 第17号
- (28) 林 謙作 1980年 「貝ノ花貝塚のシカ・イノシシ遺体」 北方文化研究 第13号
- (29) 西本豊弘 1985年 「北海道縄文時代イノシシの問題」 『古代探叢 Ⅱ』 早稲田大学出版部
- (30) サケ・マス論に関する論文を主要なもののみ挙げておく。
 渡辺 誠 1973年 『縄文時代の漁業』 雄山閣
 高山 純 1974年 「サケ・マスと縄文人」 季刊人類学 第5巻第1号
 四柳嘉章 1976年 「「サケ・マス論」の基盤について」 考古学研究 第23巻第2号
 松井 章 1985年 「「サケ・マス論」の評価と今後の展望」 考古学研究 第31巻第4号
- (31) 小池裕子 1979年 「関東地方の貝塚遺跡における貝類採取の季節性と貝層の堆積速度」 第四紀研究 第17巻第4号
 ——— 1983年 「貝類分析」 『縄文文化の研究2 生業』 雄山閣など。
- (32) 大井晴男・大泰司紀之・西本豊弘 1980年 「礼文島香深井A遺跡出土ヒグマの年齢・死亡時期・性別の査定について」 北方文化研究 第13号
 大井晴男・大泰司紀之・和田一雄・西本豊弘 1981年 「礼文島香深井A遺跡出土オットセイの年齢・死亡時期の査定について」
- (33) 金子浩昌・牛沢百合子 1980年 「池上遺跡出土の動物遺存体」 『池上・四ツ池遺跡第6分冊自然遺物編』 大阪文化財センターなど
- (34) 中野益男 1984年 「残存脂肪酸分析の現状」 歴史公論 第10巻第6号
- (35) 松浦秀治 1983年 「堆積層における骨遺残の共時性を調べる」 考古学ジャーナル No. 223
- (36) 小宮 孟 1976年 「横浜市菊名貝塚採集の魚貝類遺存体」 史学 第47巻第4号
- (37) 西本豊弘 1978年 「オホーツク文化の生業」 物質文化 第31号など。
- (38) 鈴木公雄他 1981年 『伊皿子貝塚遺跡』 港区教育委員会
- (39) 岡村道雄 1984年 「里浜貝塚西畑地点の貝塚を残した集団とその季節的な生活」 考古学ジャーナル No. 231
- (40) 須藤隆他 1986年 『中沢目貝塚—第3次調査概報—』 東北大学考古学研究会
- (41) 松井 章 1983年 「貝塚の情報性」 『縄文文化の研究2 生業』 雄山閣
- (42) 金子浩昌 1984年 『貝塚の獣骨の知識』 東京美術
- (43) 鈴木公雄 1989年 『貝塚の考古学』 東京大学出版会

(本館 考古研究部)

The Situation and Tasks of Zoo-archaeology

NISHIMOTO Toyohiro

Zoo-archaeology is a field of archaeology which takes as its objective the consideration of past human activity based on excavated faunal remains. In order to realize the situation of zoo-archaeology in Japan, it is, firstly, necessary to overview the history of the study. While zoo-archaeology is a term only recently in use, the research of faunal remains began with E. S. Morse, father of modern archaeology, excavated the Shell Mound of Omori. As Morse was conchologist, that report gave a detailed account of the shellfish content. Later Japanese archaeology, however, has concerned itself with the study of the Japanese. Further, shell mounds were excavated with the object of determining the era of remains and ruins. Concerned to the research of faunal remains, the naming alone has been considered sufficient and quantitative analysis has not been undertaken. But it is a principal achievement in zoo-archaeology before the World War II that the Jomon Marine Transgression was confirmed. The classification of faunal remains other than shellfish remains was left to the scholar of paleontology and anthropology and in most cases the meaning of these remains was not sufficiently researched by archaeologists.

After the World War II, also, shell mound investigations to determine the origins of Jomon pottery were undertaken. The faunal remains research, however, did not advance. A new development of faunal remains research began with KANEKO Hiromasa's report of the Ōkura-Minami Shell Mound which included records of quantities. After this, amongst archaeologists, researchers who dealt with faunal remains increased. It will be more necessary to cooperate with zoo-archaeologists in the future.